4．イエスキリストについて（その４）

だれが、私たちを罪ありとするのですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、しかも私たちのために、とりなしていてくださるのです。 ローマ人への手紙 8章34節

イエスさまについてもう一つ大切な話を学びます。イエスさまの復活についてです。そして、復活したイエスさまは「預言者、王、祭司」として生きて働いておられますが、これらイエスさまの三つのつとめについて学びましょう。

まず、イエスさまが肉体をとって復活なさったということを確認しましょう。実際には復活しなかったけれども弟子たちの心の中によみがえったというわけではありません。仮死状態から蘇生したのでもありません。イエスさまは十字架で確かに死にました。両手両足を釘差しにされ、とどめに心臓を槍で突き刺されて完全に死んだのです。でも、三日後に復活します。「復活する」を意味するギリシャ語「ἐγείρω」は単純に「起き上がる」

ことを意味します（マルコ１６章６節等）。イエスさまは、死んだけれども、何事もなかったかのようにからだごと「起き上がった」のです。それで、弟子たちと食事をしたり、トマスに両手の釘の跡を見せたりしました。４０日間弟子たちに現れて、彼らの見ている前で天に昇っていかれました（使徒の働き１章３、９節）。そして、その後はどうなさったのかは、「使徒の働き」が記録する通りです。

復活したイエスさまは何をしておられるのでしょうか。そのつとめは①預言者、②王、③祭司の三つに要約できます。「キリスト Χριστός」はヘブル語「メシア מָשִׁיחַ」のギリシャ語訳で、「油注がれた者」を意味します（Ⅰサムエル２章１０節等）。イスラエルでは、祭司と王と預言者が、任職の油を注がれて、主の働きをしました。一つ一つ見ていきましょう。

まず、①イエスさまは預言者です。預言者のつとめは神のことば（律法）を民に教えることです。もともとイスラエルには無いつとめですが、王と祭司が堕落して忠実に主のつとめをしなくなると、神はエリヤのような預言者を起こしてご自身のことばを語らせました。これが預言者です。イエスさまのつとめです。イエスさまは民衆にも為政者にも神のことばを教えました。そして、復活して後には、ご自身のからだなる教会を通して、教会の内外に神のことばを語ってます。

次に、②イエスさまは王です。旧約では王政はサムエルの時代に始まります。王のつとめは神のことば（律法）によって国を統治することでした。それにより神と人を愛する国家を築きます。そのために「剣の権能」も委ねられました。これが王です。イエスさまのつとめです。イエスさまは王として教会の内外で生きて働いておられます。教会では、みことばのつとめを担う奉仕者を通してみことばの統治を実現します。そして、教会の外では、為政者により、あるいは直接手を下して神のことばの統治を実現なさいます。このキリストの王権については、大きなテーマなので、また別の機会に。

最後に、③イエスさまは祭司です。イエスさまの祭司としてのつとめについては、私たちの魂の救いに関わることなので詳しく説明します。祭司のつとめは、いけにえを屠り、そのいけにえの効力をもとに、民のためとりなすことでした。

旧約時代、祭司が奉仕した幕屋は、神と人が交流できる唯一の場所でした。神は幕屋を通して民に語り、人々の祈りは幕屋を通して神に聞かれます。幕屋は、移動するシナイ山、天国の出張所、人が神と交信できる携帯電話のような者ものでした。でも、この幕屋は、民が罪を犯すと汚れて聖さを失います。神がご自身を現さなくなり、民が捨て置かれるのです。それで、神は年に一度「大贖罪の日」を命じます。この日に大祭司はやぎを屠ります。民を代表する大祭司が、自分たちの身代わりにやぎを屠ることで、やぎの死を民全体の死とします。そして、その血を幕屋と契約の箱に振りかけることで、罪を精算した

いけにえの効力で幕屋が聖さを取り戻し、幕屋が再び神が現れる場となって、神との交わりが回復しました。このように、いけにえの効力によって罪深い民が神に受け入れられるようとりなすのが、祭司のつとめでした。

こうした旧約の祭司は、実はイエスさまをモデルとしたものでした。イエスさまこそが本物の祭司です。影じゃなく本体です。使徒パウロは、復活のイエスさまが「神の右の座で、私たちのためにとりなしている」と言います。幕屋は神のおられる天国を象徴するものでしたが、イエスさまは幕屋どころか天国そのものに入ります。そして、ご自身がただ一度十字架で死なれたそのいけにえの効力をもとに、父なる神に「とりなしている」というのです。これにより、イエスさまの死が私たちの死となります。神に背くことしかできなかった私たちの罪は、イエスさまの罪となってイエスさまに転嫁されます。それと同時に、神に従い抜いたイエスさまの義が私たちの義となって、私たちに転嫁されます。それによって、イエスさまは十字架で死に、私たちは滅びを免れて天国に行くことができます。そして、使徒パウロは、このことが実現するよう、私たちのために父なる神にとりなしていると言います。つまり、イエスさまは、私たちについて、「この人たちは何一つあなたに従えませんが、彼らの身代わりとなってわたしがその罪を負い、あなたに見捨てられました。だから、わたしに免じて、彼らをあなたに従う義人と見て受け入れてください」ととりなしておられるのです。それも過去に一度だけというのではありません。「とりな

している」は現在進行形です。今も、そしてこれからも、ずうっと、結局、私たちが天国に実際に入るまで、取りなし続けてくださるというのです。

それで、パウロはこのイエスさまの姿を見た時、「自分は絶対に救われる」と自分の救いを確信します。イエスさまのおかげで「義とされている」と確信します。人は何と言おうと、自分でどう思おうと、悪魔がどう吠えても、「神が義としてくださって」います（３３）。誰もそれを覆せません。誰も私たちを「罪あり」とはできません。罪はあるけど、罪しか犯せないのですが、イエスさまが十字架で私の罪を精算し、のみならず復活して天上でご自身の義を私たちの義として私たちのためにとりなしてくださっているので、誰も私を罪に定められないのです。神は私を絶対に見捨てません。たとえ今はどんなに苦しいことがあったとしても、あるいはどんなに悪魔に激しく攻撃されても、神の愛は永遠に変わりません。神は私を必ず救ってくださいます。この真理を、パウロは天上でとりなすイエスさまを見て確信しました。イエスさまが十字架で死に、死んで終わりじゃなく、復活し、永遠に生きて、十字架の効力をもとに私たちのためとりなしておられます。これを見て「何があっても私は救われる」と確信したのです。こうして救いは復活をもって完成します。

このことを、ヘブル書の記者は次のように言い換えました。「イエスは、いつも生きていて、彼らのためにとりなしておられるので、ご自分によって神に近づく人々を、完全

に救うことがおできになります。」（ヘブル人への手紙　7章25節）